



ミルクボランティアの下で成長した子猫

ふれあい

×
やまなし
in depth

子猫の成長見守りたい 「ミルクボランティア」が救う小さな命

生後間もない保護猫を預かり一時的に育てる「ミルクボランティア」
小さな命を未来へつなぐ取り組みの現状を
やまなし in depth からダイジェスト版でお届けします。

やまなし in depth
フルバージョンはこちらから



衝撃的な数字がある。
致死処分された猫のうち92・9%は
子猫だった。これは2019年度の山
梨県内でのデータだ。
子猫の命をつなぐため、県は20年度
から「飼い主のいない猫の不妊・去勢

手術費補助」と「ミルクボランティア
事業」を始めた。以後、子猫の致死処
分数は激減している。

人と動物が調和し 共生する社会の実現

山梨県は、人と動物が調和し共生す
る社会を実現するため、致死処分の多
くを占める飼い主のいない猫対策に取
り組んでいる。施策を所管する衛生薬
務課によると、19年度の犬猫の致死処
分数は224匹で、うち208匹が飼
い主のいない猫から生まれた子猫だっ
た。子猫の致死処分を減らすには、飼
い主のいない猫の無秩序な繁殖を抑え
るとともに、県の動物愛護指導センター
(以下、センター)へ収容した子猫に新
たな飼い主を見つけることが効果的だ。
20年度に始めた事業は、それを実現す
るためのものだ。

猫の不妊・去勢手術費補助金は、手
術費用を助成する市町村への補助制度
で、当初は対象を飼い主のいない猫に
限定し、補助額の上限も1匹当たり
5000円としていた。だが、22年度

は、飼い主の有無を問わず、補助額の
上限を不妊1万5000円・去勢1万
円に拡充し、全ての市町村と連携して
致死処分の劇的な減少を目指してい
る。

また、ミルクボランティア事業は、
センターに収容した離乳前の子猫を数
カ月間育てるボランティアを募集し、
譲渡につなげる事業で、飼育に必要な



人と動物の共生社会実現に取り組む県衛生薬務課の職員

ミルクやペットシートなどの物品は県
が支給する。

離乳前の子猫は、数時間おきに授乳
したり、排便や排尿を促したりしなけ
れば生きられず、センターの職員によ
る対応にも限界があるため、ミルクボ
ランティアの協力が不可欠だ。

センターで創設時からこの事業に携
わっている、リーダーの池永由梨子さ
んは、事業開始当時のことを「何しろ
初めての試みで軌道に乗るまでが大変
でした」と振り返る。

「センターでは、ミルクボランティア
さんとの調整や必要な物品の支給、預
託中の健康相談などを行っています。
一番大変だったのがこの事業を知って
もらうための周知活動です。市町村の
広報誌やセンターのホームページ、県
のツイッターなども活用しました」

SNSなどで事業の認知拡大を図っ
たことで共感も広がった。20年度にセ
ンターに収容された子猫のうち93匹が
ミルクボランティアに預託され、途中
で死んでしまった子猫を除いた87匹が
新しい飼い主に渡った。

なぜ「ミルクボランティア」を募っ
たのか。センター所長の浅山光一さん
は、こう語る。

「01年の設立当初、センターは主に犬
や猫の致死処分を行う施設でした。以
後、犬の致死処分数は激減し、譲渡す
る割合も増えましたが、子猫の致死処
分がなかなか減らなかつたんです。当

時は地域猫活動や飼い主のいない猫の不妊・去勢手術への理解も今ほど進んでいませんでしたから。この子猫たちをどうにかしないと、と始まったのがこの事業です」

可愛い盛りには預かる 「適度な距離感」

20年11月、ミルクボランティアに登録した景子さん。60代半ばの女性で、子どもはすでに独立し、夫と暮らしている。きっかけは、21年間も飼っていた猫が死んでしまったことだったという。

「何かしないと自分の気持ちがあたりにかかってしまいそうで。そんな時、市の広報誌でこの取り組みを知りました。今から猫を飼うのはもう年齢的にも難しい、でもミルクボランティアならと思っ



「救ってあげた命が元気に育ってくれば」と語る景子さん



景子さんは育てた子猫の画像を大切に保管していた

景子さんは、一昨年16匹、昨年は20匹の子猫を育てた。1匹当たり平均して1カ月ほど預かることになる。

「何も分からない猫に、夜中にまで起きてミルクをあげたりするのはなかなかしんどいです。でも、放っておいたら生きていられない子たちですから。いちばん可愛くてやりがいを感じる期間に預かって、ある程度育ったらまた返す。その距離感が私にはちょうどいいです」

ミーミーと鳴いていた子猫が、よちよち歩きを始めて、初めて目が合ったときには「きゃあああ」と思わず歓喜の声を上げてしまう。

「致死処分されるために子猫たちが生まれてくるのはあまりにかわいそう。

救ってあげた命が元気に育ってくれば、との想いで続けています」

ミルクボランティアにとって、県の支援は十分なのだろうか。

「県の職員の方々は、保護された犬や猫に優しい笑顔を見せて、一生懸命向き合っています。それを見ると『長く可愛がってくれそうな飼い主さんに渡るまで、私たちに任せて』という気持ちになります。哺乳瓶など必要な物も支給してくれて、持ち出しになることはまったくありません。ホスピタリティはとて高いと感じます」

●●● ミルクボランティア事業の課題

事業が始まって2年が過ぎた。しかしまだまだ課題が残っている。

センターの浅山所長は「数が圧倒的に足りていません。コロナ禍もあって、増えていないのが現状です。ミルクボランティアさんの頑張りをよく知ってもらい、もっと多くの方々に参加してもらいたい。」と話す一方で「繁殖自体を減らし、預ける必要のある猫自体を減らすことも重要です。ただ可愛いからと野良猫に餌をあげるだけでは無責任な行動だと理解していただけるとありがたいです。」とも話す。

池永さんは「致死処分せずに救える命が増えたことは私たちセンターの職員にとっても心の負担軽減になりました。ここに収容されたときには弱々しかった子猫が、ボランティアさんから

戻ってくると成長していて驚き、また新しい飼い主に渡るときにはうれしい気持ちでいっぱいです。将来的には致死処分を限りなくゼロに近づけたいと思います。」と話した。

山梨県が全国をリードして始めた取り組みで、21年度の子猫の致死処分数は56匹と、19年度の約4分の1に減少した。引き取った猫を譲渡した割合も、19年度の48.7%から21年度の85.1%と大幅に上昇した。

譲渡した割合の伸び幅は、全国トップレベルに達している。



動物愛護指導センターの職員。中央が浅山光一所長、その右が池永由梨子リーダー